



仲間と育てる 愛され人参。

真っ白な雪原の向こうに美しい山並みが連なる、宮城県川崎町。
この町に、持続可能な社会のモデルを創ろうと若者が次々と移住している谷がある。
蔵王連峰の麓、前川地区だ。
そこで人参やピーツなど、様々な野菜を育てている脇田さんと利奈さん。
そして、彼らの仲間たちで目指す新たな里づくりの話をしようと思う。





パリハカ村の中心人物、マアタさんと脚さん(左)、中安さん(右)。



エネルギーの地産地消。薪ストーブを彼らは大事にする。

のテーマカラーは「ホワイト」である。
昌汰さんは京都府出身。高校を卒業後、京都市営地下鉄に就職した。運転士をしていたが23歳で退職し、ニュージーランドに渡った。「お金を中心に物事が回り、人と人とのつながりも希薄になっている世の中って、何か違う

と思う。経済だけではなく、子どもたちがこれからの生き方を学べる寺子屋のような場所を作れないかと思ったんです。まずはもつと視野を広げようと、留学を決めた。
一方、利奈さんは、千葉県出身。専門学校を卒業して、スポーツジムのイ

ンストラクターとして働いていた。仕事は嫌いではなかったが、高校の同級生たちが好きな道に進んでいる様子を見て、「このままじゃいけない」と留学を決意。もともと自然が好きで、いずれは田舎暮らしをしたいと思っていた利奈さんは、自然豊かなニュー

ジーランドを選んだ。

マオリの村に入りびたる

そのニュージーランドで、昌汰さんが衝撃を受けたのは先住民、マオリの人々の哲学だった。「マオリの人たちは自己紹介するとき、必ず自分が育った山や川の名前、それから祖父の名前を言う。自分と自然は渾然一体というアイデンティティを持っているんです」。特に、聖地と崇められるタラナキ山の麓、パリハカ村に惚れ込んだ。

ちょうど同じ頃、「もう一人、お前と似た日本人がいる」と現地の日本人に紹介されたのが、後に百で「ブル」と呼ばれる中安祐太さん(31)だ。当時の彼は、東北大学大学院で材料工学を研究する院生。震災を経て、「原発に依存した社会が破綻するのは目に見えているのに、日本は全く変わろうとしない。ならば、自分たちの手で食やエネルギーを自給できる地域をつくるしか生き残る道はない」と決意していた。昌汰さんと意気投合した中安さんは、ともにパリハカに通った。「マオリ



ゲストハウスは2022年春に完成予定。内装工事中の建物前でポーズをとってもらった。



伝統技術で炭焼窯も自作している。



ゲストハウスは蔵王連峰の麓に位置する。

蔵王連峰の中腹、青根温泉に続く一本道沿いの建設現場で、合同会社「百」のメンバーや仲間たちに思い思いのポーズをとってもらい、記念撮影をした。建設中の建物は、彼らが目指す「里づくり」の第一歩として手掛けているゲストハウスだ。2019年に取得した杉林を、自分たちの手で伐採、用地を開拓して材木を作るところから取り掛かり、今春の完成を目指す。彼らはそこで、電気や熱、食料をできるだけ自給しながら宿を運営すると言う。「百年先にも受け継がれる豊かなライフスタイルを示す拠点にしたい」。循環型社会のモデルを示すことが彼らの狙いである。

レッドとホワイト

この「百」で、レッドをテーマカラーにしているのが、今号お届けする「雪下になじん」を育てている、脚昌汰さん(29)だ。2017年にニュージーランドで出会った利奈さん(30)と2019年に結婚し、翌年には長女の里歩ちゃんが生まれた。ちなみに利奈さん